

第3回島田市教育環境適正化検討委員会【議事概要】

●日時：平成29年8月8日（火）15:00～16:40

●場所：北部ふれあいセンター コミュニティホール

●出席者

【委員】武井敦史（委員長）、池ヶ谷俊幸（副委員長）、福田秀樹、藤本敏彦、良知克明、仲安寛、榛葉徹、小島忠光、伊藤冬久、畑浩、中村延也 【事務局】濱田和彦、畑活年、鈴木龍彦、田中義臣、渡辺武資、駒形進也、大石真司、和田英弥、廣田豊和

【傍聴人】11名

●【議事概略】

武井委員長より開会のあいさつ及び議事進行

- ・本日は三回目の会議になるが、地域の方々の意見を聞く機会を設けるべきであるということで北部ふれあいセンターで会議を持たせていただくことになった。地域の方々にも発言いただく機会を持つので、積極的に参加していただけたらと思う。

今回は移動して（神座）地域で行っているので島田市教育環境適正化検討委員会について簡単にみなさんに紹介させていただく。

この島田市教育環境適正化検討委員会の設置について「島田市における教育の在り方についての提言書」（概要）を見ていただきたい。これは昨年度、一昨年度の1年半かけて島田市の教育がこれから、どんな方向を向いていったらいいのかということについて議論を重ねて作成したものである。島田市の教育理念として「地域総ぐるみで進めましょう 夢育・地育の花咲く島田の教育」ということでキャッチフレーズは設定された。ここで、キャッチフレーズの中でポイントは3点あるがまず一つは「地域」である。島田の教育は「地域」でつくっていくということ。学校だけが単体で教育組織であるということだけでなく「地域」が全体として教育に関わる。これが大前提である。それからそれを具体的にしていくために「夢育・地育」の2つの言葉が使われているが、「夢育」は地域は大切にすけど、逆にそれが内向きな子どもに育ってはいしょうがない。実際には視野を広くもって世界を見られるような子どもを育てなければならない。それと同時に足元もきちんと見なければならない。それは自分が育った環境、それから身近な人々と関わりながら育っていこうということである。これがこれからの島田市の大方針である。

そのために、基本的な方向性が5つある。一つ目は地域が主体性を持って教育に参画し、学校と協働して共に教育を支えるしくみを整えること。これは地域が学校の教育の中に積極的に参画していくこと。国ではコミュニティスクールの在り方を模索していて、これを全ての学校に広げようとしている。コミュニティスクールは正に地域が運営する学校のようなものである。これからはそのような形にしていこうということである。二つ目は地域の文化や伝統を継続するために、地域が主体性を持って教育機能を分担するしくみを整えること。学校の中に地域の人が参画するだけではなくて、地域は地域として子どもを育てていくということ。三つ目として就学前からの家庭教育を地域全体で支えるしくみづくりを進めること。四つ目として今後必

要とされる学校再編については、適正規模や学校施設の老朽化の状況などを考慮するとともに、地域の生活や文化・伝統及び活性化を島田市全体で支えるという前提のもとに、これを検討していく。

今後、子どもの全体数が減ってくる。人口も減ってくる。そうなれば当然、同程度の規模の施設を維持していくことは出来なくなってくる。これは大前提として、予算の面を考えても、子どもの教育の面を考えても避けて通れない道である。その際、学校は今までの在り方を見直していかなければならない。しかし小規模だからといって杓子定規に切っていくのはならない。むしろ小規模の地域であっても島田市全体で支えていくという大前提がなければこの話はできない。そして五つ目としてそれらを実現していくため、学校・地域それぞれにおいて、組織の在り方を必要に応じて見直し、力を集約して改善に当たる方策を検討し、島田市と島田市教育委員会とは協力してこれを支えていくことである。そしてそのための手立ては4点である。

まず一点目は「夢育」の中核的活動として、英語教育や先進科学技術教育・ICTの活用などを学校の諸活動と関連づけることで世界的な視野を持つ子どもを育てていくということである。二点目は、「地育」の中核的活動として地域に根ざして成長し、自ら地域を育てていくこと。島田市の場合はこれを一步進めて、自分が地域のことを学ぶだけでなく地域をどうやってよくしていこうかということ子ども頃から考える。こうしたことを通して地域の魅力や特色づくりに関係していく。三点目は、今後学校教育にいろいろな流れが入ってくる。告示された次期学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が目玉になっている。学校の中だけで教えられていたカリキュラムをこれから社会に開いていくということ。それから活動的に学ぶアクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメント、コミュニティ・スクール、チーム学校、小中一貫教育等の課題に対し、個別に対応するのではなく、核を形成して対応していくような教育の在り方を考えていく必要があるということである。四点目は児童生徒の教育環境充実の観点から学校再編を検討し、学校建築の工夫も含めて学校配置の最適化を模索すると同時に、当該地域の文化・伝統の維持や地域活性化を図っていくこと。こうした四つの事について実現に向けて考えていかなければならない。そしてそのために専門的なワーキンググループを立ち上げて、具体的計画を策定し、これを実現に移していくための議論を開始すること。二つ目に試行地域を設定し、教員加配等の予算措置も講じた上で、その成果・課題を検証すること。三つ目に中長期計画を策定し、試行地域の成果と学校負担への影響を見極めつつ、漸次的に市内全域に拡大していくための方策を整備すること。この三つのプロセスを組むことが重要である。

この検討委員会はそのうちのプロセスの一番目、特に学校の規模や環境に関して、どのような形で適正化するかということを考えるための委員会である。その際、当然のことながら規模で割り切ってしまう簡単だが、単にそうではなくて、それを通して地域も長期的に存続するし活性化もしていくように考えるべきだ。そして子どもの教育は地域の活性化の切り札でもあるので、これが行われる地域にしていかなければならない。しかも限られた予算の中で行わなければならない。これを乗り越えてこそ島田市の明日が考えられると考えている。そうした視点から議論を過去2回続けてきた。今までの議論の経緯については第1回、2回の議事概要があるので、ご覧いただきたい。過去2回は市役所で行っているが傍聴可能になっているということで、委員になっていなくても傍聴できる、できるだけオープンな形で議論しようということになっている。それからそれ以外の資料についても紹介させていただく。

まず「学校規模の適正化及び小児化に対応した学校教育の充実策に関する実態調査について」島田市に關係の深そうなところを紹介すると、学校統廃合による成果と課題が記載されているが大きいのは複式が解消されたとか、行事が活性化したとか、集団行事活動が充実したところである。全体としてみれば学校の統廃合によって教育環境が改善されていくことになる。友人が増えたとか多様な意見にふれる機会が増えたとか。やはりある程度、多様性が確保されたほうが教育にとっては重要であるといえる。その他学校統廃合によって生じる課題も調査している。特に通学時間が長くなることによる疲労だとか、通学路の安全確保、こんなところが重要なポイントかと思う。それから私が実際にあると思っていることは、学校は子どもの教育を司るということが一番重要な任務であるが、やはり地域の精神的拠点でもあるということである。きちんと議論をしないで安易な統廃合に踏み切れば、地域のシンボルが喪失し、地域全体の活力を失い、巡りめぐって学校教育にも良くない影響を与える可能性がある。その部分は丁寧に考えていく必要があると思っている。

別添3に「小児化に対応した活力ある学校づくりに関する参考資料」には標準規模とか統廃合後のあり方や施設の工夫について記載されている。

三つ目に「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」では、平成27年に改訂されているが、これは人口減少を考慮し、それに対応したものになっている。重要なところは文科省では学級の標準数は12から18に定めている。この標準というのはそれより多かたり少なかつたりすること自体がいけないわけではなく、おおよそ基準としてはこれくらいということを理解していただければよい。学級規模に応じてどのような対応が必要か記載しているが、1～5学級の小学校では複式学級が存在することになる。教育上の課題が極めて大きいということになる。統廃合等による適正規模に近づけることを速やかに検討する必要があると言われている。ただし地理的な条件、離島などの場合には小規模校のメリットを最大限活かすことが必要。6学級では、おおむね複式学級はないがクラス替えができない学校規模で児童生徒数が少ない場合は特に課題が大きい。更なる小規模化の場合は将来的に複式学級が発生する可能性を勘案し、学校統廃合等により適正規模に近づけると。地理的条件等についても言及している。7～8学級では全学年ではクラス替えができないため、教育上の課題を整理した上で学校統廃合の適否も含め今後の教育環境の在り方を検討する必要がある。9～11学級では半分以上の学年でクラス替えができる規模であればある程度、多様性も確保できることになる。中学校の場合には1, 2学級では速やかに統廃合を考えてほしいと、3学級でも同様である。4～5学級では全学年でもクラス替えができないということで速やかに統廃合を検討することになっている。6～8学級では全学年でクラス替えができれば、課題を整理する必要があるがすぐに統廃合を検討ということではない。9～11学級では全学年でクラス替えができ免許外指導を解消でき、この場合では弊害が少ないと言われている。

これは多くの学校関係者に聞いても感覚として近いものがある。大体、小学校でも中学校でも複数学級あればいいと。課題規模校になれば、例えば小学校1学年で5～6学級あればそれは問題あるが、その心配は島田市の場合は当面はないと考える。特に学校の在り方を考える場合は長期的に2学級が維持される。ということは各学年50人くらいいいであろうと。その位の目安を参考に考えていくことが必要であると言われている。学校の統廃合についてはきちんと合意を形成していかなければならない。統廃合を行う場合にも、機械的に統廃合するの

ではなく地元と一緒にあって長期的に住みやすい地域になっていくと、これを同時並行で考えながら統廃合していくべきということが記載されている。このようなことが国の方針として出されている。

島田市の教育環境適正化検討委員会もこうした適正配置の考え方を踏襲しているが、これをどのように次の形に模索していったらいいか真剣に考えるのがこの検討委員会である。私自身、この検討委員会を結論ありきでおこなっているものではない。今の段階ではまだいろいろな可能性があるということである。一つ言えるのは島田市の人口規模を考えると今の学校数は長期的には維持できない。このままいけば学校施設の改修も滞って十分な教育を子どもたちに提供することができないような状況になる。この辺も念頭に置きながらこれからの議論はしていかなければならない。過去2回同様の議論をしてきたが正に知恵の出どころと考えている。学校の適正化についてはいろいろな選択肢が増えてきているのも事実である。例えば小中一貫教育校として小学校と中学校をひとつの施設に合わせるとか、学校の拠点は一箇所に置くにしても、その地域の拠点を残してそれを放課後子ども教室であるとか、放課後児童クラブというようなことで子どもが集まる拠点にしていくことができる。それから学校が統廃合されれば広い校地が残るのでそこを最大限活用して地域のセンターのような形にしていくことも可能である。島田市ではすでに笹間が統廃合している。笹間の場合には良いかたちを見つけることができたが他地域ではドロドロの議論の末、統廃合されてそのしこりが強く残っているところもある。今回は規模が大きいがこの委員会で方向性を出すときは、やはり地域全体にも島田市にとっても良いと、こういう結論を出したいと考えている。そういうつもりで議論を進めていくのでよろしくをお願いしたい。

各委員、傍聴人からの意見・質疑

- ・（委員）私としては前の在り方検討委員会から、武井先生の話聞いてきたが、やはり統合には反対という人がたくさんいる。統合して寂しいということだが、子どもたちが将来的にプラスになる、地域にとってプラスになるということであれば、そちらを取りたい。未だに自分の考えが引っかかることがある。やはり学校がなくなってしまったときに、その地域の活性化は本当にできるのかと思う。
- ・（委員）今回委員長が説明してくれたが、この委員会が所掌していく範囲というかエリアがそういうことなのか、なんとなくわかったような気がする。文科省の資料によると、学級数 12～18 でどういう根拠で言っているかというところクラス替えできるかどうかだと。それはそれとして、それが一つの基準なんだなと。もう一つ大事なのは島田市内には複式学級の学校がある。それから一クラスしかなくて人数が少ない学校がある。小規模校の中でどういう特色をもった教育をしているのか、ある程度、我々も理解していかないと、単純に適正規模という数的なものだけでは島田の教育の在り方を考えた時に、数字だけの議論になってしまう。例えば伊久美小学校で言えば特任校制度を取り入れている。サタデーオープンやサマーオープン、移動教室なども行っている。そういうものをどう評価するかと思う。一番の問題は子どもたちの成長にとってどういうものが大事なのか、その観点で話は進んでいくべきだと思う。規模の適正化だけで考えてしまうので、小規模でも光る教育、大規模校でできないものが出来ている、そういったことをもう少し解明できたらとありがたいと思う。
- ・（委員長）私はそれは正にそう思っていて、小規模校の良さであるとか、特任校の良さである

とか、島田市全体にとって必要なんだという形にできれば、それは規模が小さいからただちにということではないと思う。市全体のことを考えた時に特有の意味がどのくらいあるか。地域を中心とする学校を取り巻く環境がどれだけ公共性をもっているか。それはきちんと考えていかなければならないと思う。田舎には田舎の良さがあるので、これはやっぱり大切にしていきたいと思う。私はこれは大前提と考えている。

- ・（委員）子どもにとってどういう環境が適切か、まず優先されるべきかと思う。地域の住民からすれば、教育の問題とは別の角度から必要性を訴えていくと思う。ただそのことを混同して議論はしない方がいいと思う。例えば統廃合することが決まった時点で、別の角度から利用法を考えていけばよいと思う。
- ・（委員）地域にとっては防災だったり、跡地の利用のこと、学校サイドから言えば、子どもの安心安全や通学路のこと、場合によっては学区の見直しも必要になってくると思う。今、委員が言ったように、そこは、区別しながら考えていくことがこの委員会の大事なところであると思う。
- ・（傍聴者）今回、初めて参加したが、自分は神座小学校に通っていて自分のときは複式でなかった。小学校と中学校では少し違うのかなと思う。例えば、小学校は地域に根付いたものに趣きをおき、中学校は部活が選べないとか、クラス替えができないとかがあったので、他の中学校のように部活の選択肢がたくさんあればと思う。統廃合するなら今言ったことを加味しながら検討して行ってほしい。
 - ・（委員長）中学校は部活の問題が出てくるのが大きい。小学校の場合には固有名詞で一人一人覚えているというメリットが大きくでてくる。まさにそこは考慮していくべきであろうと思う。
- ・（傍聴者）伊久美では自然があるので、自然に触れるとか、関わるとか、そういった自然を活かしつつ、考慮して検討していただけたらと思う。
- ・（委員長）伊久美は環境がすばらしいところだと思う。そういう環境は是非、残す形で考えていかなければならないと思う。
- ・（傍聴者）小規模校の支えをするということだがどういうことか。市の規模に対してクラス数が多いとのことだが数字的にどういうものなのか教えていただきたい。
- ・（委員長）小規模校の支えについて、私は支えという言葉を使ったとは思っていないが、小規模校でもその地域に児童生徒が 100 人いればその背後に 1,000 人の人が住んでいると考えるべきである。だから住んでいる人の想いは大切にしなければならない。大切にすることはいろいろ方法があって、小学校を今のまま残すことについては、規模の面があって一定の数が必要になってくる。もし何かの取組をして増やしていけるようなら、それは積極的に検討することがいいかもしれない。または小学校の教育の機能を残していくようなことも考えられるし、実際に地域の方により積極的に教育に参画できるようなあり方も考えていくことができる。現在の学区が適正規模でなければ、それは見直すことが必要になってくる。そうであっても一律に数で切り捨てるのではなくて、想いを汲みながら工夫を講じていく必要がある。それから市の規模と学級数の関係というよりも全体の学校数との関係が重要である。例えば市の人口が 10 万人であると、学校数として 20 校くらいが適正な数である。それ以上であると、施設全体の規模が維持できなくなって老朽化対策ができなくなっていくと。島田は現在 25 校あるので 2 割く

らい多いことになる。学校が多ければ、それぞれ体育館やプールも必要になるし職員室や教室もそろえなければならない。全体として施設の維持管理コストが相当大きくかかってくることになる。うまく節約できれば、施設の規模に応じてコストがかかってくるのでそれが出来ないと市全体がジリ貧になっていく可能性がある。

- ・（委員）湯日には小学校がひとつあるが、子どもたちは生き生きとして非常に恵まれた環境で育っていると思う。市全体で考えてこの状態のままいくと、子どもたちのためになるかということと、学校の運営の問題もあり、そこのところが今後の学校の在り方が議論されていくと思う。少子化が進んでいてこの問題は島田市だけではない。他のところの話も聞けたらと思う。例えば、湯日から別の学校に統合した場合、歩いていくには無理がある。地元としては学校がなくなってしまったら、その跡地に拠点となるようなものがあると地域がまとまっていけるというようなこともあるし、子ども会を残していただければと思っている。
- ・（委員長）昨年、私は掛川でこのような会を行った。今年も同時進行で森町で行っている。全国的にもたくさんあって、うまくいった例と失敗した例をたくさんみてきている。学校統廃合によりさびれてしまった地域もある。なので最大限工夫を講じていきたい。まさにこども会を設置するとか、教育活動を一部行うとか、公民館機能を学校に集約し跡地を地域のよりどころにするということも考えられないわけでない。考えるなら今だと思う。
- ・（傍聴者）この問題は避けて通れないと思っている。特に北部地域は支持会が強くある。机上の数字の部分で議論が進んだ地域は（統廃合を）やっていた。昭和 50 年台に。榛原は中学校が 16 校あったが今は 8,9 校になっている。小学校はもっとたくさんあった。島田は今後どうなるかだが、今結論を出して次に進まない、もうこの次を考えると時はないだろうと思う。地域にそれぞれ伝統と文化があり、うまく段階が進んでいけば、時はもうきていることと我々の年代層は、相賀ではまだ多くの人材がいる。もう少し経つとこの人材が減ってくる。そうするとこれを考える体力がなくなってくる。いい方向に進んでいってくれるといい。
- ・（委員長）相賀、伊太は、小学校の奥に住宅地が広がっている立地になっている。もし教育の拠点がなくなってしまうと、その奥の地域には新たに人が移住するのを躊躇してしまう可能性がある。私はそうなるのはやはり良くないと思う。教育の機能をきちんと残しながら、学校再編を考えるべきで、他地域の例を見てもいろいろな人は入ってくるができる地域は、まちがいなく教育がしっかりしているということになる。
- ・（委員）相賀小学校は地域に支えられている。地域といい関係になっている。小規模の良さはそれぞれあるが、子どもの育ちがいいなと感じている。小規模の質を落とすことなく次のステップにいけたらいいが、考えてみたが中々難しい。その質の維持は今の地域の支えがあつてのことなので、これが統廃合になった時はどうなるのかわからない。
- ・（委員長）小規模であれば一人一人学校も地域も覚えてくれる。それが子どもを支えていることになるので、その部分はきちんと残すような方向で考えたい。
- ・（傍聴者）コミュニティスクールとか ICT の活用による教育の充実と規模の在り方との関連はどうか。小規模校でもこれらは十分に機能していけるのではないかと思う。ICT 等を活用していけば、小規模校も残せるような提言をしていただきたい。
- ・（委員長）いろいろな可能性があると考えている。確かに考えられることなので、是非考えていきたい。

- ・（傍聴者）この検討委員会では何を焦点にしているか教えて頂きたい。
- ・（委員長）一つは島田市全体で見たとき、どの位の数の学校がどんな風に配置されること望ましいのかを考えていくのが一つの大きな焦点である。それと同時に子どもたちの教育がどうしたらよくなっていくか考えることがもう一つの焦点である。それから第三に学校再編に付随して生じる地域の活性化という問題である。
- ・（傍聴者）希望だが、みなさんの話がまっすぐ向かって行ってほしいことと、ここで議論したことが、どう具体的に現状に反映されていくか観察していくことが自分の役割だと思っている。
- ・（委員長）市（長）の方に提案という形で積極的に提言していきたいと思っている。議論の内容はオープンになっていて全て公開しているので、流れをみて行ってほしい。今年度中にどこまでの結論が出るかわからないが、何らかの形で出したいと考えている。
- ・（傍聴者）私は早く統合した方がいいと思っている。いずれ子どもの数は減っていく。この現状が続けば学校が成り立たなくなる。市の予算も限りがある。今の島田市の学校数を維持していくのは無理がある。その際に子どもたちの学びを最大限保証し質の高い教育環境をつくっていただきたい。これからの未来の子どもたちのことを考えると、やっぱり今のままでは足りない部分があると思う。市の教員の方、教育委員会に取り組んでいただきたい。ただ統廃合ということではいけない。
- ・（委員長）まさに学校の再編を考えるとこそ、ICTとか夢育とかは、その学校が一番先端にいくんだという、そのような形で学校はやっていくべきだろうし、是非そうありたいと考えている。
- ・（傍聴者）先日、事務局にもお願いしたが、これから議論する内容について極力地域の人が見える形でお願したい。会議は誰もが見えるわけでない。出てきた結論だけが先にいってしまう。先ほどの話の中で、最初に学校の教育環境についてのことを言っていたので、その順番を守っていただきたい。また可能であれば多くの人が傍聴できるような時間の設定をお願いしたい。
- ・（委員長）議事録だけを読んでも中々難しいと思う。時間についても検討させていただく。今日アンケートを作らしてもらった。もしできれば地元の方々の意見を聞きたいが参加した人だけだとごく一部になってしまうので、小学校等を通して、子どもを持たれる家庭に配布してアンケートを実施させていただく。
- ・（傍聴者）今日は環境適正化検討委員会でどのような意見が出てくるのか興味があって傍聴させていただいた。
- ・（傍聴者）委員長が先ほど言った、今年度何らかの方向を出すということだが、具体的レベルが見えてこないの、どのあたりまで出てくるのかわかれば知りたい。
- ・（委員長）それに関しては私もわからない。どういうことかと言うと、間延びするような会議はしたくないと考えている。ただしこの議論は非常に大きな問題である。拙速な結論の出し方はいけない。今年度で出すということは議論が深まった、そこまでの結論を報告書等で出すということである。なのでゴールとして今年度末に提案として具体的な学校配置までいけるか、それとも方向性を出して、その後議論をもう一段深めていく段取りにするのがいいのか、それはこの議論次第である。
- ・（傍聴者）今は児童委員で小学校や中学校に訪問することがある。小規模校は顕微鏡や本が一

人一台、一冊だったりする。北中や神座小は施設の老朽化が進み、市の予算も掛かってくるだろうと思う。今日はいろいろな人の意見を聞いて、いろいろな考え方があんだというのが自分の気持ちである。小さい学校から大きい学校になった時、大変な子も出るのかなと思う。そう考えると、ある程度の適正規模が必要かと思う。

・（事務局）島田市は市の規模に対してどの程度学校数が多いのかという質問ですが、藤枝市は27校（小中）、焼津市は22校（小中）。人口を見ると藤枝市は146,368人、焼津市が140,747人となっている。島田市は人口約10万人で25校。人口を学校数で割ると約4,000人となる。藤枝市は島田の換算でいくと36校、焼津市は34校である。いかに島田市が人口に対して学校数が多いかということがわかる。藤枝市は大洲地区と瀬戸谷地区で小中一貫教育が行われているのでN委員に説明をお願いしたい。今後、第4回以降については環境について具体的な意見を詰めていくことを事務局としては希望する。例えば学校を集約させることによって全教室エアコン化するのかとか、部活の選択を増やすのか、ICTを充実させるのか、支援員の数を増やすのか、ALTを集約して国際教育をするのか、あるいは義務教育学校を探るとか特認校として残っていくとか。また集約することによって地域の時間をつくっていくとか。そういった意見が活発化していくことを事務局は期待している。N委員から藤枝の状況がわかれば説明を教えてください。

・（委員）娘が瀬戸谷小学校に通っている。瀬戸谷学区では小中連携を10年間の準備をして今年度から本格的に行っていると聞いている。直接聞いたわけではないが毎週木曜日に5、6年生が中学に行って勉強している。小学校の先生が中学校に教えに行ったり、中学校の生徒が小学校に来て体育を教えに来たりしている。英語の先生が小学校に教えに来ている。兼務することで教員の数を減らしたりして運動会を合同で行っている。

・（委員長）学校の適正規模を考えると小中あわせて5,000人に1校で考えると考えやすい。藤枝は27校で14万人なので概ねいい。北海道のような広いところは、もっと1校あたりの人口は少なくなる。おおよそ静岡県の規模で考えるとそれ位になる。

・（委員）今の小中連携というのは、小中一貫校を目指す前提というのか、その土壌づくりになるのか。

・（委員長）私は昨年、藤枝で検討委員会をやっていたので話をすると、瀬戸谷という地域は小学校1校と中学校が1校ある。その気になれば同じ子どもがそのまま中学校に行くことになるので施設を一体化することに地域的な支障は少ない。ただ今は別々にある。長期的には建替えの時にはおそらく、一体化の方向で考えると思う。

・（教育長）今の2歳児が北部4校で19人、1歳児が18人、0歳児はまだわからない。今の2歳児が小学校2年生になるときは伊太も神座も複式になる可能性がある。そういう現実が一方である。また、私は笹間中にいたことがあるので、小規模でいいのは1年から6年まで同じ活動ができる。1年生が6年生の姿をいつも見ている。なので自立心がある。6年になったら自分が主役だという自覚がある。一方で課題は先生の数が少ない。複式の場合は2学年を一人の先生がみることになる。片方が授業をやっているときはもう片方は自習になる。そこに支援員は配置しているが授業はできない。このような課題がある。私は笹間中にいたが笹間小は先生が出張の時は必ず自習を余儀なくされるということ。小規模校は良さもあるが課題もある。ICTもテレビ会議室をやっていたが効果があるのは少人数と少人数の時である。ICTにも限界がある。初倉地区には夢育・地育の研究指定をかけている。ここではコミュニケーション能力を高める目的で行って

いるが湯日小、初南小、初倉小、初倉中の4校でおこなっている。それぞれ学校の規模が違うのでコミュニケーション能力をより効果的に育てるにはどのくらいの規模が適切かという研究も行っている。そういう結果もこの委員会の中に反映できたらいいと思っている。

・(委員長) 率直にいうと今日は地域で行ったので、いろいろなお叱りをもらうと思っていたが、実際にやってみたら、思っていることはそれほど違っていなかった。地域も大切しなければならないが子どもの教育をないがしろにしたら学校は成り立たない。これからの教育は地域の方々が頼りになってくる。我々は検討会をやって一つの方向性は出すことができる。それを実際に形をつくっていくのは地域の方々においてほかにはないので、我々はその議論を透明に行い進捗は報告していくので、次の形がみえてきた時は力になっていただきたい。これで本日の検討委員会を終わります。